月曜日の挨拶と Grice の原則

チャーチル・イートン

日本人の英語学習者に“How was your weekend ?”と尋ねた場合、よく耳にするのは“I went shopping”といった返答である。そのような場合、多少同情的な native speaker であれば、少し間をおいて“So, what did you buy ?”や“Where did you go shopping ?”といった質問で応じるであろう。そして、返ってくるのは、買った品物や買い物をした場所の名前といった簡単な答えにとどまるだろう。おそらく、その話し手は、あともうひとつくらいやりとりを続けたあと、相手がその話題に興味がないのか、悪くすれば英語能力が不十分なために週末の出来事を話すことができないのではないかと考えて、その話題をあきらめてしまうであろう。

しかし、その原因はただ話題に興味がなかったり、英語力が不足しているせいではないかもしれない。おそらくこのような miscommunication の原因は、二人の話し手が会話のやりとりに何を期待するかの違いである。英語の native speaker が、“How was your weekend ?”といった質問するのは、会話の話題として「週末」を選ぼう、お互いの週末について話しをしよう、と提案しているのである。さらには、自分と相手の経験について何らかの感想を共有するということまでもが期待されているのである（“It was fun”、“It was exhausting”、“That sounds really interesting”、etc.）。したがって native speaker から見れば、“I went shopping”といった返答は、相手が「いつ」「どこで」「だれと」「何を買ったか」などの十分な詳細を話していないという点で Grice (1975) の「量の原則」（maxim of quantity）に反していることになる。加えて、その返答は、週末がどうであったかという感想も含んでおらず、すなわち「関連性の原則」（maxim of relevance）をも侵していることになる。

一方で、日本人の英語学習者は自分の返答が Grice の「量と関連性の原則」に反しているとは感じていないのかもしれない。なぜならば、学習者が月曜日の朝に予期している質問（例えば「週末はどこかに行きましたか？」）に対して“I went shopping”といった返答は十分且適切だからである。したがって native speaker があとに続けて尋ねるさらに詳細を問う質問は、学習者には不適切にさえ思われる可能性がある。

ここで重要なのは、月曜の朝の挨拶のような日常的なやりとりにも文化差が存在するといったことや、会話の原則はおそらく文化によって異なるといったことだけではない。むしろ、このような文化差を語学教育にもっと利用しなくてはいけないということである。“How was your weekend ?”のようなやりとりが、ある種の感想までも含んだ話を要求していることを学習者に指摘することによって、私たちは彼らに会話を広げるチャンスを与えることができる。また、そのような文脈において、native speaker がどのように話を組み立てていくかを示すこともできる。さらには、会話の中で期待されるルーティンに従わないと、良くても会話がそこで中断してしまい、悪くすると英語の運用能力に不当な評価を受けてしまうことになりかねないということにも理解を促す必要なあろう。

Grice, P. (1975). Logic and conversation. In P.Cole & J.Morgan (Eds.). *Syntax and semantics, 3 : Speech acts (pp. 41-58). New York : Academic Press.*